

# 成果報告書

## I. 研究概要

|           |   |
|-----------|---|
| 氏名        | ポリー・ザトラウスキー   |
| 所属        | ミネソタ大学  |
| 招聘回（招聘期間） | 第7回、2012年10月～2013年8月  |
| 招聘研究テーマ   | 日本語と英語による食べ物に関する会話のモダリティとエビデンシャルティ  |
| 研究目的      | 本研究の目的は、モダリティとエビデンシャルティが用いられる可能性が高い料理、食べ物に関する会話を対象にし、1)日米ではモダリティとエビデンシャルティの形式の数と機能はどのように異なるか、2)それらの形式は会話の流れの中でどのように用いられ、それぞれの言語と文化で意見と知識の提供・交渉の仕方とどのように関係するか、3)日米のモダリティとエビデンシャルティの体系はどのように説明できるか、という3つの観点から考察することである。 |

研究概要：本研究は、モダリティとエビデンシャルティ(ME)が用いられる可能性が高い料理、食べ物に関する会話を対象にし、1)日米ではモダリティとエビデンシャルティの形式の数と機能はどのように異なるか、2)それらの形式は会話の流れの中でどのように用いられ、それぞれの言語と文化で意見と知識の提供・交渉の仕方とどのように関係するか、3)日米のモダリティとエビデンシャルティの体系はどのように説明できるか、という3つの観点から考察する。

1)に関しては試食会の30歳以上の男女グループでは、日本人が⑧終助詞、①概言、③感覚的証拠が多かったのに対し、アメリカ人は②信じていることや意見が圧倒的に多かった。日本人は、⑧終助詞と①概言を用いて食べ物の同定(identification)/評価を述べると同時にほかの参加者の同意を求めたり、間接的な表現や条件表現を用いて不同意を間接に表したりした。一方、アメリカ人は、他の参加者の同意をほとんど求めず、同意・不同意を述べるよりも②信じていることや意見(“I think”)を用いて自分個人の意見を直接述べるのが観察された。このように言語によってモダリティ・エビデンシャルティの用い方に参加者の関わり合い方が反映している。

2) ②信じていることや意見(日本語の「と思う」、米語の“I think”)の相互作用での用い方は日米で異なっていた。日本語では食い違った意見が出た後、一人の話者が「思う」を用いることで自分の意見を強調したり、和らげたりしながら、話をまとめるのに対し、米語の参加者は連続して独自に意見を述べるために“I think”を用いることが観察された。このように言語によってモダリティ・エビデンシャルティを表す類似した形式でも相互作用の中での用い方が異なる。

また、日本語を中心にモダリティとエビデンシャルティの表現を用いてどのように同意を得ようとするのかを考察した。食べている物を同定したり、評価したりする際、まず一人の話者が同定/評価をする。そしてそれに対する反応を見ながら同定/評価を継続したり、変えたり、正当化する発話連鎖を作り上げていく。相互作用におけるME表現の用い方に三つのタイプが見られた。一つ目は、相手が同意しないことに対して積極的に同意するように誘導するMEの連鎖と相手が自分と類似した同定/評価をしたことに対して同意を積極的に示すMEの連鎖が見られた(JPN8、FFF>30)。二つ目は、相手が同意しないことに対して評価を諦めるME連鎖や同定を変えたり、正当化したりしていくME連鎖があった(JPN3、fff<30)。さらに、積極的に同意を誘導せず、自分の評価/同定をし、相手の反応を求めたりしないようなME連鎖があった(JPN12、mmm<30; JPN11、MMM>30)。性、年齢によって用いられるタイプが異なるように見えるが、資料が少ないため、一般化は難しい。

3) 本研究では、従来の研究を踏まえ、モダリティ・エビデンシャルティを表す言語表現を8種類に分類した。

①概言/信頼性：A(断定)保留、B可能性、C(直感的)確信、D様態

②信じていることや意見

③感覚的証拠

④類似性 (カテゴリー・予想)

⑤演繹法

⑥体験の有無：A 保留、C 確信

⑦知識の有無：A 保留、C 確信

⑧終助詞等：A 保留、C 確信

①～⑤は Chafe (1986)、①は益岡 (1991) と益岡・田窪 (1992)、⑧は神尾 (1990) の研究を援用した。それに、⑥と⑦を加え、さらに益岡・田窪 (1992) の概言の ABC を⑥～⑧に広げて分類を作成した。日米のモダリティとエビデンシャルリティの体系はこの 8 種類の ME 表現の数 (日本語は①③⑧、英語は②が多い) と上述した使い方の違いが観察された。

従来のモダリティ・エビデンシャルリティの研究では文レベルの話者中心の主観性に焦点が置かれてきたが、本研究では ME 表現は話し手の主観的判断だけではなく、相互作用の中で同意を求めたり、ほかの参加者の反応に応じたりする際に用いられ、連鎖していくことが明らかになった。

展望：今度は英語による試食会とレストランでの会話資料を増やし、日本で収集した日本語による会話と比較対照したり、日本で収集した日本語による試食会とレストランでの会話をほかの観点から考察したりすることが課題である。例えば、これらの会話において過去に起こったことや、ストーリー等を語ったり、家族について話したりすることが多く見られるが、何がきっかけや、その話と現在食べているものに関する話との関係等を考察する研究である。また、今後は実際の、様々な種類の談話における相互作用でモダリティ・エビデンシャルリティがどのようなストラテジーで用いられるのか、言語間での比較・対照もする必要がある。